

修士論文（要旨）

2021年1月

初級日本語教育における人称詞の指導

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

217J3904

山中 里紗

Master's Thesis (Abstract)

January 2021

Teaching Personal Nominals in Japanese Language Education for Beginners

Risa Yamanaka

217J3904

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiko Aoyama

目次

序章

第1章 研究の動機・目的

- 1.1 研究の動機・目的
- 1.2 自身の経験から

第2章 現状

- 2.1 初級の教科書・指導書の現状
- 2.2 問題提起

第3章 初級日本語教科書分析

- 3.1 分析する初級日本語教科書
- 3.2 総合初級日本語教科書以外での人称詞の取り扱い
- 3.3 人称詞を解説している日本語教科書

第4章 分析

- 4.1 人称詞の英訳
- 4.2 アポイダンス
- 4.3 実際の会話における使用と分析

第5章 ロールプレイによる人称詞の学習

- 5.1 ロールプレイの有意性
- 5.2 ロールプレイの例

終章 教師の役割

参考文献

日本語教員としての経験の中で、初級日本語教育における人称詞の指導について疑問に思うことがあり「初級日本語教育における人称詞の指導」をテーマに選んだ。日本語学習者が日本の映画やドラマを見たり、日本で生活したりするときさまざまな人称詞を耳にする。しかし、初級日本語学習者が教室内で学習する人称詞は「わたし」「ぼく」呼びかける際は「あなた」であることがほとんどである。教室内で学習する人称詞が少ない理由は「教科書で取り扱われていないこと」「日本語教師の理解不足」である。

29冊の日本語教科書で、人称詞の取り扱いの分析した。初級の教科書で、自分自身の呼称で「わたし」以外に提示されているのは「ぼく」で13冊に出現した。『みんなの日本語』では「きょうは 僕の 誕生日だ」という例文を用いて、語彙のひとつとして「ぼく」を紹介している。『大地』では、「ぼく」が例文としてみられる課はなく、まとめの練習問題で「僕は消しゴムを忘れました」という一文のある読解問題ではじめて登場し、説明は特にない。この二例は解説がない例である。『げんき』では「ぼくも海が大好きです。」という文が会話の練習で登場し、語彙として「ぼく」が紹介され、英語で「I (used by men)」と説明されている。この説明ではプライベートな場面でも明瞭に役割が決まっている場面でも使用できるのかどうか不明である。英語訳が「used by men」であるため、成人した男性のみ使用できるとも受け取れる。

“Japanese for busy people”では、会社で上司からのお土産を食べるように勧められた男性が「ぼくは いいです」と話す一文がみられる。「ぼく」は英語で“I/me(informal; used by men and boys)”と説明されている。英語の解説を読めば「ぼく」は informal な場面で男性が使うわたしであると理解できるかもしれないが、それは一つの例文を読むだけでは立場や状況の説明が十分ではない。状況は「会社で上司からのお土産を食べるように勧められた」であり、場所は職場である。職場は informal な場面ではないが、なぜ「ぼく」が使えるのか説明が必要なければ混乱を招く可能性もある。教科書を分析していくと、人称詞はいくつかの状況と例文を用いて指導され、学習者自身が使用する練習が必要であるという考えに至る。

初級日本語学習では教科書を用いて指導されることが主流だが、教科書で取り扱われていないため、人称詞が授業内で実践的に指導されることはない。教科書での説明が英訳のみなどの簡素になるのは、初級では説明が難しく無難なものにおさまってしまうという現状があるからである。

人称詞の学習方法としてロールプレイを提案する。まずは、登場人物が「自分と目上の人」という状況と「自分と同輩・同等の人かそれよりも下」という状況を対比して、自分自身と話し相手をどう呼びかけるかを練習する。

「A・Bの日本語を考えて、ペアで話しましょう。こたえはひとつではありません。」という問題を提示する。状況は<職場にいます。Aさんは上司で、Bさんは部下です。>である。

Aさん：Bは新しいスマホってどう思う？

Bさん：Bはいいと思います。

次の状況は<AさんとBさんは友達です。ふたりは食事をしています。>である。

Aさん：Bは新しいスマホってどう思う？

Bさん：Bはいいと思う。

以上の二つは、立場と状況ときっかけの会話を提示するロールプレイである。「新しいスマホ」は例で教室内に適した自由な話題を使用する。学習者にはプライベートな場面とそうでない場面であるということに気付いてもらい、「わたし」「ぼく」「おれ」などのどれが適切・不適切かを話し合う。次に、プレゼンテーションや SNS に投稿する場合のように多数に対して何かを主張する場合や会話の相手がいない場合での状況を設定して練習する。最後に、名前を知らない人に呼び掛ける練習である。これは人称詞の代わりに「あの」「すみません」等の呼びかけで人称詞をアボイダンスする練習である。

三輪(2010)は、日本語にはどんな相手にも使える一人称二人称は存在しないと述べている。つまり、答えは存在しないため、できるだけ多くの経験と練習を積むことが必要である。よって学習者に人称詞について指導するよりも適切・不適切かを考える場を提供することが日本語教師の役割であると考えている。

参考文献

- 三輪正(2005)『一人称二人称の対話』人文書院
三輪正(2005)『日本語人称詞の不思議』法律文化社
鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
鈴木孝夫(2000)『鈴木孝夫著作集 6 教養としての言語学』岩波書店
ネウストプニー, J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波書店 [新書]
村上龍(1998)『イン ザ・ミソスープ』幻冬舎
青山文啓(2007)「ことばの研究と辞書に記載される情報」『桜美林論集』31, pp. 37-45.
新海誠(2016)『小説 君の名は。』KADOKAWA/メディアファクトリー
Murakami, Ryu (2003) *In the Miso Soup*. (英語版『イン ザ・ミソスープ』マッカーシー, ラルフ[訳]) Kodansha International.
Shinkai, Makoto (2017) *Your name*. Yen On.